# 東條義門について

○眞宗々學と義門……住田智見
○私藏義門上人の書簡……吉澤義則
○世に行はる『於乎輕重義』の二本及びその成稿の時……高島正
○義門師語學研究の目的……大島仲太郎
○語辭林香記を繙きつゝ……橋川正
○編輯日誌……同

## 義門の筆蹟

（卷頭口繪參照）

むかしもろこしめける名付ていとさかしがるはかせ有けり、しゆん何とかやさだかにはおぼえず、くさ〴〵の論ともたてける中に、性は惡なりといはんとて、久方の月なきよひはくらぶ山もとより闇き所なりけりと云ければ、同じよにものいひふかのいとゞさはらかなるが有て、あら玉のとしにとぐとも固よりのひかりあらずばあらはれめやもとなんさだめしとかや、しかるを又一人ともにもとかむとて、ひむがしに西にながせばながしやる其方に水はながれゆくものと詠み出けるよしなれど、そのをの子は名をもわすれつ、うちは告とかあら玉のとよめりしはこは氏を覺えず、名を軻とつけりしかし、ほの聞きおぼえたれどたがひやあらん、さてしかあらそひたてる論めとものありしに、やゝ手後れてのよ又何とかやいひしが

秋を經て霜にしぐれにそみそまずもみぢもみぢぬ木々はさま〴〵とよみためるは

いかゞあらむすべていかゞあらむと或人かたりき

義　門